

日本近代文学に描かれた明治学院（その2）

—— 山崎俊夫と李光洙と「耶蘇降誕祭前夜」——

岩 田 ななつ

はじめに

明治学院普通学部に学び、大正時代に『三田文学』の作家として活躍した小説家に、山崎俊夫（1891～1979）がいる。しかし、作家として大成することはなく、現在一般的な日本近代文学史に、山崎俊夫の名前と作品は記されていない。

これまで、山崎俊夫は朝鮮近代文学の祖である李光洙（1892～1950）に、トルストイを紹介した明治学院時代の友人として、李光洙をモデルに小説「耶蘇降誕祭前夜」（『帝国文学』1914年1月）を書いたこと、などで注目されてきた。⁽¹⁾

その一方で、山崎俊夫の世界に魅了されたフランス文学者の生田耕作（1924～1994）が、「過ぎたるデカダン、過ぎたる耽美、過ぎたる倒錯の故に、日本近代文学史から放廃・抹殺された、幻の鬼才・山崎俊夫。半世紀余の歳月を経て、今ここに初めて甦る蠱惑の作品集」と、『山崎俊夫作品集』全五巻を刊行し、「〈少年愛〉をテーマに特異な作品を残した」その文学の全貌が明らかになった。

明治学院が舞台となっている日本近代文学作品としては、島崎藤村（1872～1943）の、『桜の実の熟する時』（『文章世界』1914年5月～

1918年6月)が著名である。この明治20年代の明治学院を描いた『桜の実の熟する時』の原型は、「桜の実」である。「桜の実」は、フランスに旅立つ前の藤村が、『文章世界』(1913年1月, 2月)に連載して、第2回を掲載したあと、いったん中断してしまった作品である。その「桜の実(二)」に明治学院が登場するので、日本近代文学に明治学院が描かれた嚆矢は、藤村の「桜の実」と言えよう。そして、その約1年後に明治40年代の明治学院を描いたのが、山崎俊夫の「耶蘇降誕祭前夜」(『帝国文学』1914年1月)なのである。

『山崎俊夫作品集』全五巻を読むと、その文学活動は明治学院時代から始まっていて、明治学院について記した文章が予想以上に多いことに気づく。本稿では、山崎俊夫の明治学院時代の小品や、短編小説「耶蘇降誕祭前夜」を読みながら、山崎俊夫が明治学院に学んだ意味を考察し、明治学院から生まれた文学として「耶蘇降誕祭前夜」を紹介してみたい。

1. 山崎俊夫と明治学院

山崎俊夫は、1891(明治24)年7月1日、盛岡市に父・梓、母・艶の次男として生まれた。盛岡中学校を経て、父親の仕事の関係で1905(明治38)年東京に移住。大成中学校、明治学院普通学部、慶応義塾大学予科、文科に学ぶ。永井荷風の文学を慕って慶応義塾に進学し、1913(大正2)年から『三田文学』に小説を発表。『帝国文学』『秀才文壇』『雄弁』など掲載雑誌の幅を広げながら、24歳の1916(大正5)1月に短編小説集『童貞』(四方堂)を自費出版する。3月に慶応義塾を卒業し、原稿執筆に専念するが売れず、9月帝国劇場に入社。1920(大正9)年7月には、役者に転向するため帝国劇場を退職、新文芸協会の俳優になる。石垣彌三郎の芸名で、数多くの新劇に出演し続ける。38

歳の1930（昭和5）年4月に俳優を止め、翌年には結婚し、1936（昭和11）年11月、SSK（松竹少女歌劇団）に文芸部員として入団。雑誌『少女歌劇』の編集に従事しながら随筆等を書く。79歳の1971（昭和46）年4月に自叙伝を書くため、自筆年譜を作成。1979（昭和54）年5月7日死去する。享年87歳10ヶ月。

以上、山崎俊夫の「自叙伝風年譜」⁽²⁾を参考に、その生涯を簡単にまとめてみた。次に、大成中学校時代と明治学院時代について、もう少し詳しく見てみる。

山崎俊夫は、「自叙伝風年譜」に、神田三崎町の大成中学時代（1905年4月～1908年3月、13歳～16歳）を次のように記している。

友人五六名と結んで紫蘭会というグループを作り回覧雑誌を編輯したことで学校当局から危険思想だとにらまれた。洪命憲という名の朝鮮人の生徒ともっとも親しく交際した。

ここでは、李光洙と明治学院で会おう前に、洪命憲と親しんでいる点に注目したい。洪命憲（1888～1968）は、後に朝鮮の独立運動家、作家として活躍する人物である。李光洙も明治学院普通学部に進入学（1907年9月）する前は、大成中学に学び、洪命憲と同じ下宿で生活し親しい関係だったので、山崎俊夫と李光洙には洪命憲という共通の友人がいたことになる。しかし、山崎俊夫の文章によれば、大成中学後は洪命憲との交友も途絶えてしまったようである。晩年に新聞で洪命憲の活躍を知り、山崎俊夫は次のように驚いている。

わたしはかつて朝鮮人の友達をたくさん持っていた。（中略）色白の眉目秀麗な貴族的な顔立ちだったので、君は朝鮮の李王家の親類かとわたしが尋ねたくらいだった。（中略）無二の親友となっ

てしまった。(中略) 猿楽町の彼の下宿に行くと、机の上には高価な新刊書がうず高く積まれてあって、貧乏学生のわたしなどは、何時も洪君から借りて読むことになっていた。

トルストイ、松村介石、徳富蘆花、夏目漱石、などに心酔していたわたしを揶揄しながら彼は、思想的なもの、哲学的なもの、社会学的なものに傾倒してゆく傾向があった。(中略) 論争が激しければ激しいほど、その逆にわたし達の友情は底知れずに深まってゆくのをするすることもできなかった。

彼が帰郷したのは何時頃だったか、わたしはもう忘れてしまった。お互いに消息を断って何十年、ふと、ある日の新聞に、彼の名が活字となって現われた。その記事によると、彼は北朝鮮の首班の一人として挙げられていた。(朝鮮最高人民会議常任副委員長で三月五日八十歳で死去)

わたしは信じられなかった。同名異人かも知れない。手紙を出してみようかとも考えたが、果して彼の手に届くかどうかは疑問だからあきらめた。⁽³⁾

この文章からは、大成中学で洪命憲に出会い、洪の所有している書籍を読み、彼との議論を通して、思想と文学観が深められたことがわかる。それでは、1908(明治41)年4月から1910(明治43)年3月までの、明治学院普通学部時代(16歳～19歳)は、何に出会ったのか。さらに、「自叙伝風年譜」を見てゆく。

明治41年4月 芝区白金の明治学院に転校した。わたしはこのミッションスクールにたった二年間ただけだが、その二年がわたしの生涯に二つの大きな影響を残した。その一つはキリスト教の信仰で、も一つは文学であった。そしてこの二粒の麦の種をわ

たしに植えつけたのは、李宝鏡と呼ぶ朝鮮人であった。大体この学校には朝鮮人と台湾人の生徒が非常に多かったが、李君はわたしの家庭にもよく出入していた。日本人の同級生としては餌取光弥などと交際した。下級生に熊谷直正という名の美少年がいてわたしはこの子に淡い愛情をそそいでいた。ワイコフ、ランジス、ライシャワールなどアメリカ人の教師の家庭によく遊びに行った。毎日曜日にはかかさず教会の礼拝に出席した。高輪教会の田島牧師から洗礼を受けたのもその頃である。（中略）家庭が貧しかったのでこの年の夏から秋にかけて築地の同気クラブ[*玉突場]にボーイとなってアルバイトした。⁽⁴⁾

箇条書き的に挙げれば、山崎俊夫は明治学院で、①キリスト教信仰と信仰への疑問、②文学、③李宝鏡（李光洙の兄名）、と出会ったのである。次に、この三点について考察する。

まず最初に、「①キリスト教信仰と信仰への疑問」であるが、そもそも山崎俊夫は、なぜ大成中学から明治学院に転校して来たのであろうか。1910（明治43）年10月に書いた「躓いた少年の手紙」（直筆本『A DROP OF DEW』）⁽⁵⁾の次の箇所に注目したい。

日曜日の朝キリスト教会に往つてみるならば其処には「愛」と云ふ字に酔つて凝り固つた幾多の年若い、或は年古りたる男性女性の羊群を見るでせう。私はその群の中の一匹の羊となつたのです。（中略）同級生が浴せかける冷笑の声を私は黙つて忍びました。（中略）私がとうとう神田の私立学校を棄てて芝のミッションスクールに移つたのは無理もない事です。（中略）私が受けたバプテスマは唯に水のバプテスマに過ぎなかつたのです。（中略）信仰に躓いた私はキリストを否定したばかりではなくあらゆるものを

否定しました（中略）しかしながら私は「自己」を否定するわけには往きませんでした。

大成中学時代に教会に通うようになった山崎俊夫は、もっと信仰を深めてゆける環境を求めて、明治学院に転校したのであろう。そして、高輪教会で洗礼を受けた。しかし、信仰への疑問を抱くようになり、教会から離れてゆく。ちょうど時代も日露戦争後で、近代的自我に目覚め、個人主義的思想を持つ新しい男女が生まれている時を、山崎俊夫も生きていた。1910年は、自然主義文学の全盛期でもあり、その一方で『白樺』、『三田文学』、『新思潮』（第二次）などが創刊され、耽美的、理想主義的な文学が生み出され始めた時代でもある。

次に「②文学」であるが、やはり島崎藤村と文学講演会、そして『白金学報』（1903～1921）の存在が大きかった。山崎と藤村の文学に共通点は指摘できないが、「島崎藤村様へ」（『文章世界』1911年4月）を読むと、藤村を大先輩作家として、無邪気に羨望している姿に微笑まれる。

まづ云はなければならぬのは私があなたと同じく明治学院の卒業生だと云ふ事です。私が明治学院に入つたのは何もあなたの名にひきつけられて入つたわけではありません。けれども記念樹の青々と茂つて並んでる校庭を歩くとき、寄宿舎の廊下を歩くとき、藤村等の植ゑた記念樹はあれだとか、藤村が本を読んだ部屋はこの部屋だとか云つて友人が話してくれるたびに私はあなたの名が懐かしくてたまらなかつたのです。図書室へ行つて本を読んでも時にも、ふとこの本もやはり藤村が手にした事のある本ではないかと思つて、本の表紙を嗅いでみたり、頁を繰つてみて、中から何か書いた紙切が出て来はしまいかなどと、途方もない事を

考へた。（中略）藤村詩集はずつと下級生の頃、記念樹の下に置いてある年号を刻みつけた石に腰掛けて読みました。『春』はよく試験の時などたつた一人で白金台の瑞聖寺へ往つて透谷の墓場で読んだものです。『並木』や『壁』は寄宿舍の窓で静かに読みました。私は明治学院といふものと藤村といふものとをはなして考へるわけには行きませんでした。私は始終あなたの若い時代の事を胸に描きながら、高輪の町や白金台の林をあるきまはつては一人で嬉しがつてゐました。⁽⁶⁾

そして、文学講演会である。小山内薫（1881～1928）を追悼して書いた、「古き手帳より」（『三田文学』昭和4年3月）は、当時の明治学院の文学講演会の様子をよく描いているので、引用が長くなるが次に紹介する。

その頃私は明治学院の生徒だつたから、丁度十六七歳になつてゐたと思ふ。明治学院と云ふのは白金の小高い丘の上に建つてゐる耶蘇教のミツシヨンスクウルで、私の生涯の中の一番ものに感じ易い少年期をこの異教のミツシヨンスクウルに過したことは、可也意味のあることだと今では思つてゐる。この学校は誰でも知つてゐる通り藤村先生や馬場先生達の母校であつただけに、非常に文学的色彩の濃厚な学校で、毎月のやうに文学講演会が催された。

講演会の催しは大抵は土曜日の晩の七時頃からだつた。私達は掲示板に貼り出された講演者の名を見ては、胸を跳らせながらその晩の来るのをどんなにか楽しみにして待ち暮したことだつた。（中略）講演会に出席する聴衆の大部分は神学部や高等部の生徒で、普通部の生徒はほんの僅かしかなかつた。（中略）ある晩昇

曙夢先生がこのサンダム館で露西亜文学の講演をされたことがある。ツルゲネフだのゴルキイだのアンドレエフだのと云ふ名が如何にフレツシユな感じを自分に与へたか（中略）そしてその晩「獵人日記」の一節やアンドレエフのある作品の筋などを話されたが、昇先生のその上手な筋の話し方にすっかり魅せられてしまつて、私は亢奮のあまり到頭あくる朝まで眠られなかつたことを覚えてゐる。

ところがある日のこと、放課後すぐにチャペルに於て文学講演会を催すと云ふ掲示が貼出された（中略）チャペルでしかも放課後すぐに文学講演会などを催すと云ふことは、これまでにあまりないことだったので私達には異様に感じられた。この日の講演者が即ち小山内先生だつたのである。題目ははつきりとは記憶してゐないけれども「イプセンの戯曲に現はれたる女性」と云ふやうな意味だつた。⁽⁷⁾

時代の最先端をゆく芸術家と文学と思想に、月に一度は出会える場所が明治学院の文学講演会で、文学に魅了されていく美少年・山崎俊夫の姿が見えるような文章である。小山内薫との出会いは大きくて、慶応義塾の予科の生徒になってからは、イプセンの「野鴨」を読む講義に、本来なら予科の生徒はまだ出席出来なかつたのに聴講し、自由劇場の舞台を見続け、結果、小説世界から劇場生活に移行、深入りしていった山崎俊夫の原点が、明治学院の文学講演会にあったのである。

『白金学報』については、「③李宝鏡（李光洙の兄名）」と一緒に論じてみる。

李光洙が、初めての小説「愛か」を完成させて発表したのは、1909（明治42）年12月発行の明治学院同窓会誌『白金学報』19号である。そして山崎俊夫も同じ号に初作品「星狂人」を掲載した。李光洙の「愛

か」は、孤独な少年・文吉が、年下の美少年・操の愛を求めていったんは操も受け入れてくれたが、本当に自分が操に愛されているのが不安になり煩悶する内面を綴った、自伝的短編小説である。山崎俊夫の「星狂人」は、夜の白金の森を歩きながら、星に就いて哲学的に追及してゆく熊谷さんという美少年の姿を描いたエッセイ風の小品である。熊谷さんとは、山崎が「自叙伝風年譜」に「下級生に熊谷直正という名の美少年がいてわたしはこの子に淡い愛情をそそいでいた」と記した、熊谷直正であろうか。しかし、「熊谷さん」の名にカムフラージュした、山崎自身の姿とも読むことが出来る作品でもある。

李光洙は、1940（昭和15）年8月「我が交友録」（『モダン日本』）で、山崎俊夫を次のように懐かしんだ。

私達が親しくなつたのは中学三年からで、二人ともまだ子供でしたが、山崎君は実に私を大事にして下さいました。二本榎の山崎君の御宅へ遊びに行つてお母さまやお兄さまにお会いしたこともあります。山崎君はトルストイが好きで、また星が好きでした。夜は星空を仰いでは泣いたりしたものでしたが、君は宗教的であつたやうでした。私がトルストイの作品に接したのは実に山崎君を通してゝあつて、加藤直士訳のトルストイの本など片端から読んだものでした。（中略）山崎君に対しては、何んだか初恋仲のやうで生涯忘れられず、始終懐しみをもつてゐるにはゐるものゝ、お会してからもう二十年以上になります。昭和十二年でしたか、君は改造社から私の住所を聞かれて、御家族の写真も送つて戴きましたが、（中略）今度東京へ出られたら真先に訪ねようかと思ひます。⁽⁸⁾

ここで、李光洙が山崎を「星が好き」「夜は星空を仰いでは泣いたり」

「君は宗教的」と記憶している点に注目したい。この姿はまさに、「星狂人」の熊谷さんと重なっているからである。それは、李光洙が自分の初小説が掲載された『白金学報』に、共に発表された、山崎の「星狂人」の印象が強かったことを推測させるのではなかろうか。さらに、「初恋仲のやうで生涯忘れられず」と記している点も興味深い。一方、山崎俊夫が、李光洙の「愛か」をどう読んだか記されたものはないが、『三田文学』の作家として、一貫して美少年愛の世界を耽美的な小説に描き続けた山崎であるから、「愛か」の世界に触発されたのではなかろうか。山崎は1910（明治43）年12月の『白金学報』22号に、次のような短歌4首を掲載した。

熱きもだし

野をぞ行く語らず秘めしふたりなり熱きもだしを胸より胸に。
たゞ行けばはらはら落ちし涙かな君なき夏のゆうぐれさびし。
鳥追ひてさまよひ行きぬ森の路ゆふ日は落ちぬ胸いたきわれ。
しるしては棄てしるしては捨てやりぬ君に書かんと苦しみし歌。

李光洙と山崎俊夫が明治学院普通学部を卒業した1910年3月の5ヶ月後の8月22日、韓国併合に関する日韓条約が調印。朝鮮総督府を置き、日本は韓国を植民地にした。1909年11月7日から1910年2月5日までの、李光洙の日記「私の少年時代—十八歳の少年が東京で書いた日記」⁽⁹⁾を読むと、「実に朝鮮人は心配だ。大人物はいないな」「昨夜の夢が面白かった。僕は朝鮮人を扇動した罪で死刑の宣告を受けた」「礼拝時間は本当に嫌いだ。その祈祷会はすべて神様を恥ずかしめるだけだ。『大日本帝国を愛護して下さい。伊藤〔博文〕公のような人物を送って下さい。』滑稽！ 滑稽！ それでも彼らはキリスト教信者だというのだ。」と、植民地にされつつある祖国に対する哀惜と義憤、そして日本と明治

学院のキリスト者たちに対する怒りが吐露されているが、果たして当時の山崎俊夫が、この李光洙の煩悶、葛藤を理解しようとしたかは疑問である。

2. 山崎俊夫と李光洙と「耶蘇降誕祭前夜」

1913（大正2）年1月、永井荷風（1879～1959）の推薦で、21歳の山崎俊夫は『三田文学』に小説「夕化粧」を発表し、『三田文学』の作家として活躍を始める。その一年後、『帝国文学』（1914年1月）に掲載されたのが、「李宝鏡」と実名を出して李光洙との世界を描いた「耶蘇降誕祭前夜」である。李光洙は、明治学院普通学部を卒業して帰国し、五山学校の教師になっていた。二人が明治学院同窓会誌『白金学報』19号（1909年12月）に、競うかのように、初めての作品を完成させて発表してから約4年後になる。

山崎俊夫は、「耶蘇降誕祭前夜」のなかで、明治学院を異国情緒を漂わせる場所として描き出す。

ある羅曼底な事情からわたしが白金の宗教学院に通ふ事になつたのは、まだわたしの父母が伴天連の妖術とか、嬰兒の磔殺とか、異教伽藍の密禱とかいふやうな、伝説時代の迷信を抱いて居る頃であつた。

そして、その世界に住む繊細で孤独な美少年が「わたし」である。

礼拝の時間として聖別されてあつた時間に、毎朝この礼拝堂へ来て跪くのが、わたしに言ひ知れぬ歎びと哀しみとを注ぐので、その哀歎きはまりなき神経質の戦慄を培ふために、わたしはよく

朱欒色のボヘミアン硝子を透してわたしの膝や指さきに落ちて来る美しい日光を凝視めながら、エホバの神を念じ、聖母瑪利亞を念じた。

「わたし」が、ある日いつものように一人で校庭の木馬にもたれてみると、「李宝鏡」が初めて「わたし」に話しかけてきた。韓国留学生の「李宝鏡」は、エキゾチックな容貌の美少年として描かれる。「わたし」のロマンチックな空想を刺激する存在である。

李宝鏡は金髪青眼の脊の高い少年で、皮膚の色さへ黄色人種とは異つて居るので、常に「混血児」といふ陰口が李宝鏡の身邊につき纏つて居た。殊にその鼻の著しく露西亜風の曲線を帯びたところが、わたしをしてすら容易く、露西亜の青年士官と朝鮮の薄命な娘との薄幸な恋物語をまのあたりに彷彿せしめるには、あまりあるものであつた。けれども李宝鏡は何時でもさう人に言はれる毎に、飽くまで手強く否定するのが常であつた。

初めての出会いの時、「李宝鏡」は次のような言葉を口にして、「わたし」を驚かす。

「わたしはいつでもこの木馬へ乗つて、今ではもう誰も口にしなくなった亡国の歌を歌ひながら、たつたひとりでかうして居るのが好きなんですもの」「亡国つて言つたつて朝鮮のことぢやないんです。幾千万年の以前に亡ぼされて、今では水の底になつてしまつたといふ、廢市のことなんです。わたしばかりぢやなくあなただつてあの亡国の民に違ひないぢやありませんか」。わたしはただますます李宝鏡の言葉に驚かされるばかりであつた。

ここでは、「亡国の歌」「亡国の民」とは朝鮮のことではなく、「わたしばかりぢやなくあなただつてあの亡国の民に違ひない」と言う、「李宝鏡」に注目したい。「廃市のこと」と重ねての表現から考察すると、「亡国の民」とは、罪惡と道德的退廢のゆゑに滅ぼされた二つの町、旧約聖書・創世記のソドムとゴモラのことはなからうか。つまり、「李宝鏡」は退廢（ここでは、同性愛的嗜好）を心に抱え持つ同じ存在として、「わたし」を見ぬいて、近づいてきたのである。

胡桃の樹陰にたつてゐる古ぼけた木馬は、何時しらず、臆病な神経質なわたしと、日本人の生徒からも朝鮮人の生徒からも指弾される李宝鏡とを、離れがたなく結びつけてしまった。（中略）

李宝鏡は亡国の民といふことを繰り返して言ひながら、竟には涙ぐんで来た。（中略）廢顔し糜爛し果てた残忍苛酷な性情を、飽くまでこまやかに噛みわつて、口移しするやうにわたしへ言つてきかせた。（中略）はては耳のなかへ毒艸の茎からしぼつた劇しい液体を、注ぎこまれるやうに感じはじめた。（中略）胡桃の花のさくころわたしがたつたひとりで、木馬へ乗つてゐるのを見た時から、すでにわたしの美しい病気を看破してゐたのだ、と李宝鏡は最後に白状した。（中略）金髪青眼の李宝鏡は竟にわたしを捕へて、美しい病気の火宅の中に投げこんで、そこからわたしを逃すまいと思ふためか、日夜わたしの靈魂の扉を見守つて居る。

「わたし」は「わたしの美しい病気」を隠して孤独に生きていた。しかし、それも、「李宝鏡」によって、「廢顔し糜爛し果てた残忍苛酷な性情を」「口移しするやうに」「美しい病気の火宅の中に投げこ」まれてしまった。本来の「美しい病気」の世界に、二人は入り込んでしまう。

「耶蘇降誕祭前夜」では、所々に当時の日本人の韓国人に対する蔑視

の眼も描いている。「ランデスさんのところに居る、はねつかへりのおはんさん」に片恋している青年が、「おはんさん」は「李宝鏡」を愛しているらしいことに気づき、学友たちが、「恋人を朝鮮のしかも混血児なんかに横奮されるのは、日本人として大なる恥辱ぢやないか」と口にする場面もある。しかし、あくまでも「わたし」と「李宝鏡」の「美しい病気」の世界は揺るがない。

「耶蘇降誕祭前夜」は、次のように終わる。

耶蘇降誕祭前夜は竟に來た。その晩は東京にしてはめづらしく雪が降つた。わたしはすつかり雪装束をして、灯の点くを合図に家を出て礼拝堂の階段を昇つた。(中略)待つ間ほどなく李宝鏡の姿が門の側の瓦斯燈に照されて、幽霊のやうに蒼白く現れた。(中略)「あれほど約束しておきながら、今になつて言はないなんて卑怯ですよ。さあわたしは仰有る通り混血児ですつて、たつた一言言つて下さい、それでわたしの気がすむんだから」。

しかし李宝鏡は黙つて居る。ややしばらくしてわたしは三度催促した。

「だあれもききやしないんですもの、言つたつていいでせう」。

すると李宝鏡はわたしの膝に顔をあてて、

「雪がきいてゐますもの。雪がきいてゐますもの」。

と言ひながら、奴隷が暴王に哀願する時のやうに、雪の上へ跪いた。

美しい少年である自分自身を愛し、美しい少年を愛する性癖をもっていることを「美しい病気」と捕らえている「わたし」は、どこまでも「李宝鏡」を「露西亞の青年士官と朝鮮の薄命な娘との薄幸な恋物語」から生まれた「混血児」として愛したいのである。「わたし」に懇願さ

れても、「仰有る通り混血児です」とは言わない「李宝鏡」。韓国併合の当時の時代背景のもとで、「耶蘇降誕祭前夜」を読めば、「美しい病気」だけではない「李宝鏡」像が浮かび上がってくるが、あくまでも山崎俊夫の求める少年愛の世界を、「白金の宗教学院」と「李宝鏡」を効果的に使って表現したのが、「耶蘇降誕祭前夜」だったのである。

付記 山崎俊夫の文章の引用は、生田耕作編『山崎俊夫作品集』全五巻（奢瀾都館，1986～2002年）に拠る。ルビは省略し、旧字体は新字体に改めた。

注

- （1）山崎俊夫に関する主な先行研究を次に記す。秋山繁雄「山崎俊夫」『白金通信』138、139号、1980年6月7月。波多野節子「李光洙と明治学院」『言語文化』15号、1998年。村上文昭「山崎俊夫―偏奇と耽美の作品を残す」『藤村から始まる白金文学誌』明治学院大学キリスト教研究所，2011年。
- （2）『夜の髪 山崎俊夫作品集・補巻二』211～234頁。
- （3）「けいべつ」『政界往来』昭和43年5月。引用は『山崎俊夫作品集・補巻一』111～112頁。
- （4）『夜の髪 山崎俊夫作品集・補巻二』216～217頁。
- （5）『夜の髪 山崎俊夫作品集・補巻二』168～169頁。
- （6）『玉虫秘伝 山崎俊夫作品集・下巻』奢瀾都館，1992年，285～286頁。
- （7）『古き手帳より 山崎俊夫作品集・補巻一』奢瀾都館，1998年，67～76頁。
- （8）引用は、『近代朝鮮文学日本語作品集 評論・随筆篇3』緑蔭書房，99～100頁。
- （9）佐藤飛文訳，引用は『明治学院歴史資料館資料集 第八集―朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院―』明治学院歴史資料館，2011年。

参考文献

- 『明治学院九十年史』明治学院，1967年
- 『明治学院百年史』明治学院，1977年
- 村上文昭『藤村から始まる白金文学誌』明治学院大学キリスト教研究所，2011年
- 波多野節子『李光洙・『無情』の研究—韓国啓蒙文学の光と影—』白帝社，2008年
- 『明治学院歴史資料館資料集 第八集—朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院—』明治学院歴史資料館，2011年
- 秋山繁雄『明治人物拾遺物語—キリスト教の一系譜—』新教出版社，1982年
- 明治学院人物列伝研究会編『明治学院人物列伝—近代日本のもうひとつの道—』新教出版社，1998年
- 佐々木邦編『明治学院生活』明治学院大学編集委員会，1953年
- 大村益夫『朝鮮近代文学と日本』緑蔭書房，2003年
- 大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集 評論・随筆篇3』緑蔭書房，2002年
- 山崎俊夫『美童』（生田耕作編『山崎俊夫作品集・上巻』）奢瀾都館，1986年
- 山崎俊夫『神経花瓶』（生田耕作編『山崎俊夫作品集・中巻』）奢瀾都館，1987年
- 山崎俊夫『玉虫秘伝』（生田耕作編『山崎俊夫作品集・下巻』）奢瀾都館，1992年
- 山崎俊夫『古き手帳より』（生田耕作編『山崎俊夫作品集・補巻一』）奢瀾都館，1998年
- 山崎俊夫『夜の髪』（生田耕作編『山崎俊夫作品集・補巻二』）奢瀾都館，2002年
- 李光洙『無情』（波多野節子訳，朝鮮近代文学選集1）平凡社，2005年
- 岩田なつ『日本近代文学に描かれた明治学院（その1）—太田治子と明治学院と『私のハムレット』—』『明治学院大学キリスト教研究所紀要45号』2012年12月
- 仁田一三編『高輪教会七十年誌』日本基督教団高輪教会，昭和27年
- 高輪教会百年史刊行委員会編『高輪教会百年の歩み』日本基督教団高輪教会，昭和57年
- 島崎藤村『藤村全集・第五巻』筑摩書房，昭和42年